奥日光の歴史

奥日光は、奥日光はとても印象的な地形を持つ土地であり、その歴史は奈良時代(710–792)にまで遡ります。767年、栃木県生まれの高僧・勝道上人が、男体山の登頂を始めます。日光の男体山は(その頃から)聖なる場所として考えられていました。782年、彼は3度目の挑戦で登頂を果たし、二荒山神社の奥宮を設立します。奥日光は、特に日本の「山伏」たちにとっての聖地となります。山伏とは、山々を崇拜する「山岳信仰」の信徒(修行者)のことです。このような修行は現在も行われています。

788年には、勝道上人が湯本温泉を発見。その後数世紀に渡って、奥日光は日本全国から多くの宗教者・修行者を引き寄せる、巡礼地となりました。

1868年の明治維新以降、海外からの旅行者が日本を訪れはじめ、奥日光は避暑地として特に人気となります。1872年には英外交官のアーネスト・サトウが初めて日光を訪問。日光には外交官たちのかつての夏の邸宅が(今も)残っています。

1873年には地域住人により始めてイワナが中禅寺湖に放流され、1878年には旅行作家のイザベラ・バードが奥日光を訪れます。

そして1934年、日光は国立公園に認定されたのです。